

2018/09/16 先週のメッセージより

「神の治療」

■ 私たちの病気は何か

「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

(マルコ 2:17)

イエス様は、ご自分を医者に、私たちを病人にたとえられました。私たちは、いったいどのような病気にかかっているのでしょうか。それは、「自分が嫌い」という病気です。

神の律法は、「神を愛し、人を愛せよ」ということに集約されます。ですから、自分を愛せないのは罪なのです。この罪という病を、イエス様はいやすと言っておられるのです。

もしかしたら、あなたは「私は自分を愛している」と思うかもしれませんが。けれど、あなたは自分を誰かと比べたことはなかったでしょうか。あるいは、〇〇のようになりたいとあこがれを抱いたことはなかったでしょうか。見た目を整えたり、人の目を気にしたりするのも、今ある自分に満足していないということであり、潜在意識の中では、自分を愛していない表れなのです。

そもそも私たちが罪を犯してしまうということが、自分を嫌っている表れです。今の自分が嫌いだから、他の人に対して嫉妬や怒りを覚えて悪い行いに発展するのであり、自分の持っているものに満足していないから、富の奪い合いが起こり、争いに発展するのです。罪はすべて、自分が嫌いだというところからスタートしています。

なぜ自分を嫌うのでしょうか。自分の容貌が好きではない、能力がない、自分の環境が悪い等、表面上の理由は一人一人様々ですが、その本当の理由は、すべての人が共通して持っている潜在意識にあります。それは不安です。

人間は心と体から成る総合体です。私たちの心は、神のいのちで造られた魂に属し、永遠性を持っていますが、やがて土に帰る肉体は、この地上に属し、有限性を持っています。永遠性と有限性というまったく異なるものを同時に抱えているために、その潜在意識は不安に満ちあふれているのです。

また、永遠性を持つということは、神に属する永遠のいのちという土台を持っているということです。この土台によって、私たちは自分が良きものだということを知っています。つまり、誰もが、人として良いことをしなければならぬという良心を持っているのです。ところが、その魂を支える体は肉に属しています。肉に属すものは肉しか求めません。永遠を知りながら永遠ではない、良きことを求めながら良きことができない……、人は皆、このジレンマを抱えています。どんなに神を求めても、この世界は神との結びつきを失っているため、私たちは、神を見ることも触ることもできず、交わることができません。しかも、体は肉なる安心を求めているために、この世では肉の思いに耳を傾けざるを得ず、人は皆、肉の

思いに支配されています。

私たちは皆、神を知りながら神のもとに行けず、良きものなのに罪人であるという、自分ではどうすることもできない矛盾を抱え、不安を抱いているのです。パウロは、自分自身のこの状態を指して、「なんと自分はみじめな人間か。誰がこの死の体から救い出してくれるのだろうか」と叫んでいます。

しかし、このような状態は、悪魔がアダムとエバを欺いて罪を犯させたことによるもので、私たちが選択したものではありません。ウイルスに感染してしまうのが自分の選択ではないように、私たちが本来の姿を失い罪人になってしまったのも自分の意思で選択したわけではありません。そのため、神はそれを病気として扱い、無条件でいやしてくださるのです。それが、イエス・キリストの十字架です。

■入院

人は、罪人である自分が嫌いで、こんな自分を愛してくれる人は誰もいないと思っています。そのために、汚い自分を隠し、「私は罪人ではない」と自分を偽っている偽善者です。そのような私たちを、イエス様は罪人のままで愛すると言っておられるのです。

「きよめる方も、きよめられる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」」（ヘブル 2:11-12）

イエス様は、私たちに「あなたは私の兄弟だ。私はあなたを誇りとする。」と語り、つまりは「あなたのことがそのままで大好きだ。」と言っておられます。この呼びかけに応答すると、罪の癒しが始まります。それは、イエスが用意した病院に入院し、治療が開始されるということです。

「そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。」（ヘブル 3:1）

「ですから、聖霊が言われるとおりに。「きょう、もし御声を聞くならば、荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」

（ヘブル 3:7-8）

「兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がいないように気をつけなさい。」（ヘブル 3:12）

神は私たちに繰り返し、「神を信じて神のもとに行きなさい。」と語り続けておられます。ところが、多くの人が、良い行いができるようにならなければ神のもとに行くことできないと思い込んでいます。しかし、これは、病気を治してからでない入院できないと言っているのと同じです。

この世界の多くの人が、人は行いによって救われると思っていますが、そうではありません

ん。神の呼びかけに応答するだけ、つまり、信じるだけで救われるのです。

■治療

神を信じて、神のもとに行くということは、イエス様のもとに入院するようなものです。その後は、いったいどのような治療が始まるのでしょうか。

体の病気で入院すると、まず様々な検査を受けて、どこが悪いのか、他に病んでいるところがないかを明らかにします。それと同様に、神の前に出ると、今まで気づけなかった自分の罪があぶり出されて、自覚できるようになります。今まで多少は立派だと思っていた自分の罪を目の当たりにして、自分のみじめさに驚くものです。

もし、体を検査して、次から次へと病気が見つかり、自分の手に負えない状態だと気づいたら、私たちはどうするのでしょうか。医者の前にへりくだって、「どうか助けてください」と懇願することでしょう。自分の罪があぶり出されたら、神の前にへりくだって、神にすべてをお任せし、手術を受ければ良いのです。罪の治療には、「神の前にへりくだる」という過程が必要なのです。

「神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

(ヘブル 4:12-13)

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」(ヘブル 4:16)

神の手術とは何でしょうか。それは、「とりなし」です。神は、決して人の罪を裁きません。どんな罪も赦し、愛してくださいます。この「それでも私はあなたを愛している」という愛こそ、「全き愛」であり、誰でも神の前にへりくだる時、この全き愛を受け取って癒されるのです。

神様は、私たちがこの愛を受け取ることを願って、私たちが神の前にギブアップしてへりくだるまで、私たちの罪を示し続けます。このため、聖書には「神は愛する者を叱る」とも書いてあります。

この愛を受け取ると、人は、嫌っていた自分を受け入れられるようになり、愛せるようになります。罪人の自分を受け入れられるようになるのです。

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」(ヘブル 7:24)

「とりなし」とは、「罪を赦す」ことです。それは、旧約時代から一貫して行われてきた教えです。旧約時代は、動物のいけにえによって、罪の赦しを受け取りました。それが祭司の務めです。そして、ついに、イエス・キリストが、十字架にかかって自らいけにえとなり、罪の赦しを完成させたのです。イエス・キリストの「それでも私はあなたを赦す」という、全き愛を受け取ると、「こんな私でも愛されている」と信じることができるようになり、それが私たちの不安を排除し、恐れを締め出すようになります。

神は、この手術を何度も繰り返し、何度でも「それでも私はあなたを愛している」と語り続けます。私たちが罪に気づくたびに、神の手術に身をゆだね、愛を受け取ることによって、私たちの中にあった不安は少しずつ取り除かれて、キリストと共に癒されていくのです。

■リハビリ(回復)

体の手術が成功しても、また手を動かしたり足を動かしたりするには、リハビリが必要です。同様に、神の手術にもリハビリが必要で、それは、十字架を仰ぎ見ることです。十字架を見るという回復のプログラムによって、私たちは完全にいやされた自分が見えるようになります。

私たちは永遠を知りながら有限であるという矛盾によって不安定になり、自分を愛せないという罪の病にかかっています。神は、異なる二つの思いの片方を消すことで、私たちを不安から解放しようとしてくださいました。それが、イエス・キリストの十字架です。この地上では、私たちはどうしても死に勝つことができません。そこでイエス・キリストは、十字架で死に、死に負けたように見せながら、三日目によみがえり、最後に勝つのは永遠のいのちであることを見せてくださったのです。つまり、この世界は死に飲み込まれましたが、イエス・キリストは、いのちによって死を飲み込んでくださったのです。永遠のいのちが死を飲み込む時、私たちの罪も飲み込まれてしまうのです。

不安なとき、十字架を見ることで、神が確かに死に勝利したこと、永遠のいのちは死に勝つことを確認することができます。「死は勝利に飲み込まれた」とは、私たちの中にあった矛盾も、罪に汚れた自分も、すべて飲み込まれて消えてしまったということです。これが十字架に死ぬということです。神の手術のあと、不安な私たちに、神は「もう大丈夫だから、動かしてごらん」「恐れるな」「あきらめるな」と何度も励ましておられます。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

(へブル 11:1)

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」(へブル 11:13)

リハビリを通して、十字架によって与えられた永遠のいのちと勝利を見ます。人は、地上で永遠の体を手にはできませんが、信仰によって、永遠のいのちを手にはしていることを見ることができます。すると、感謝が生まれ、現状の自分をそのまま引き受けること

ができるようになります。信仰は、自分を受け入れる薬です。死の体に属するものは、すべて消えてなくなります。しかし、永遠のいのちがすべてを飲み込むことを信仰で見られるようになると、私たちは地上では旅人だと喜んで受け入れられるようになるのです。そうして、信仰は、愛することができるという勝利をもたらすのです。

■治療上の注意

罪のいやしで気をつけなければならないことは、決して自分で自分を裁かないことです。あなたは、ただ神の愛を受け取ることだけに専念しなければなりません。いくら神が罪を赦すと言っても、あなたが従わなければ、治療が止まってしまいます。神の思いに反することが罪です。神のことばに反して、自分を裁く落とし穴に陥らないように気をつけましょう。「私はあなたを赦し、愛する」という神のことばを、最後まで受け取りましょう。そうすれば、あなたは自分を愛し、人を愛するように入れられ、不安から解放されます。

「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」(Ⅱコリント 7:10)

「悔い改め」と訳されている「メタノエオー」という言葉は、「方向を変える」という意味であり、罪を悔いるという意味はありません。つまり、神の御心に沿った悲しみとは、神に立ち返り、心を神に向けて治療を受けることに向かわせるものです。世の悲しみは、とにかく反省を促します。しかし、反省は罪に対する勝利ではなく、敗北です。ただ罪を悲しんでも、神の治療を受け、永遠のいのちを受け取らなければ、何にもなりません。

罪の反対は信仰です。罪とは不信仰のことです。この世では、罪とは悪い行いのことだと考えますが、この思い違いによって、悔い改めとは悪い行いを悔いることだという誤解が生まれました。この世の基準によって、罪を犯さないように気をつけ、倫理的な行いを積み重ねても、行いで天国に行くことはできません。あなたが神を受け入れるかどうか、聖書が問うのはそれだけです。イエス・キリストを信じなければ天国には行けないのです。

聖書が教える罪に対する勝利は、方向を変えることです。神は、あなたを「裁かないで赦す」と言っておられるのですから、ぜひその愛を受け入れて生きましょう。

後悔と信仰の違いは、イエス様を裏切ったユダとペテロを対比させるとよくわかります。ユダは自分の罪を知ると、自分を赦せないと行って、自らのいのちを絶ちました。しかし、ペテロは、自分の罪を悲しんで、「それでも私はあなたを愛する」という神の愛を受け取ることを選択しました。

治療に必要なことは、決して自分を裁かないことです。イエス様は、裁いてはいけないことを教えるために、次のように言っておられます。

「そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」(マタイ 18:21-22)

神の赦しを受け取って、何度でも人を赦すことで、自分自身が癒されるのです。人は失敗や過ちを犯すものですが、裁いてはいけません。神の愛を受け取りましょう。自分を愛するとは、神の愛を受け取り、神と共に自分を引き受けることです。自分ではできないことですが、神と共になら引き受けることができます。こうして、神に愛されていることを知れば知るほど、私たちは人を愛するようになり、人の罪を見ても裁くことはなくなり、むしろとりなすようになるのです。こうして神を愛し、人を愛するという神の律法は成就します。あなたを赦し、あなたを愛するという神の愛を受け取り続けましょう。